この町を変えるのは誰か

いよいよ新年度が動き始めました。自然界でも、あちこちで新しい息吹が感じられる季節です。入学、入社などでこれまでとは異なる環境での生活が始まり戸惑っている方も多いのではないでしょうか。

しかし、心配は無用、人生は「日々これ新たなり」です。誰もが一日として同じ日はないのですから、あとはおかれた環境にいかにうまく適応していくかです。なにも変化がないと思っている町の姿も、実は目に見えないところで変化が始まっているのです。最初は気づかなくても、こうした小さな変化の積み重ねが大きな変化につながっていくのです。

問題は、その変化の予兆を知り、方向性を見定めることにあります。その上で自分の立ち位置を確認し、どちらに向けて舵を切るべきか、何を基準に判断すべきか、歴史に学ぶ必要があるのです。

世界情勢も小さな地域社会も、もとをただせば一人一人の積み上げからなっています。その一人一人が変われば世の中も変わります。風が吹いたら桶屋が儲かると言うように、誰かが風を起こしたら世の中も動き始めるようです。

この国の失われた30年は重い課題ですが、この周回遅れを取り戻すためには、一人一人が一歩前に踏み出すしかないのです。いつまでも愚痴るよりも、自分から一歩前進を始めましょう。自分で出来ることはいっぱいあるのですから、、、。（自戒を込めて）

上島町長　宮脇　馨

CONTENTS

広報かみじま
2018年6月号　第165号

今月の表紙

5月11日(金)～13日(日)にかけて、瀬戸内国際ヨットラリー 2018の参加者が上島町を訪れ、寄港中は弓削商船高専の学生らが町内の案内人として「おもてなし」活動をしました。

2　町長の独白 / 目次
3　島々の話題～特別編～
4　魚島診療所
6　健康だより
8　上島の遺跡 / 島おこし協力隊活動報告
9　LETTERS FROM SCHOOL
10　ALTコーナー / 観光協会だより
11　上島の文芸
12　しまなみ農業だより
13　消防だより
14　介護保険料
15　お知らせ
17　お知らせ / KAMIJIMA KITCHEN
18　お知らせ
20　島々の話題
22　戸籍だより / 1歳のお誕生日おめでとう
27　行事カレンダー　/ 潮汐表 / 潮湯だより
28　KAMIJIMA SNAP

地域ボランティアの手で 埋もれていた観光資源に光を

桜が満開の西部八幡神社

岩城西部地区の西部八幡神社は、以前は子供の遊び場であったり、地区の人々が集う憩いの場でした。しかし近年は雑木や竹が生い茂り、年に数人しか訪れない場所になっていました。そこに手を入れて観光整備に乗り出したのが、西部地区の古本真澄さん（67）と児玉弘道さん（65）のお二人です。

訪れた人に喜んでもらえたらと語る古本さん（左）、児玉さん（右）

廃材を利用したベンチでくつろぐ散歩客

お二人は桜や山つつじが咲き誇る様子を眺めながら、「雑木を伐採して地域が美しくなると、それが観光資源になる。身近な場所に宝物があることに地域の人も気付いてほしい。」と語られていました。

また、最下段には、地区の方から提供を受けたものを利用した菖蒲園も完成し、間もなく美しい花が見られるとのことです。

お二人は神社の境内周辺の雑木の中に、桜や山つつじが埋もれていることを残念に思い、まずは日の光を当てるために雑木の伐採から始めました。とはいえすべて人力での作業で、しかも農業の合間を見ながらのため、最初はなかなか作業が進みませんでした。しかしお二人の行動に賛同した地区の方々が徐々に増えていき、雑木の運搬や下枝処分場所の提供など、自然と役割分担ができ、昨年の10月から始めた伐採作業は、約半年かけてほぼ終えることができました。今では桜と山つつじ、神社の社や石垣が県道から見え、さらに廃材を利活用したベンチを作るなど、とても景観が美しい憩いの場所として再整備されました。

石垣の水路と菖蒲園

待望の医療体制を整備

魚島国民健康保険診療所

魚島地区では、懸案となっていた魚島国民健康保険診療所の改築と常駐医師の確保が相次いで実現し、離島医療の体制が整えられました。

これらは、地域住民の要望に国や県、そして町関係者らが一体となって進められ、魚島地区でも町内の他地区と同等の「地域医療の確保」が図られました。

診療所を改築

4月18日(水)、魚島国民健康保険診療所の竣工式が行われ、宮脇町長や町議会議員、工事関係者ら30人が出席し、診療所の完成を祝いました。

式は最初に神事が行われ、引き続き宮脇町長が挨拶を行った後、設計、施工業者に感謝状が贈られました。

旧診療所は、昭和48年に建築されたもので、耐震基準を満たしておらず、医療環境の再整備と災害時の被災者救護を行う中心的役割を担う施設の整備が求められていました。

この魚島国民健康保険診療所は国保調整交付金や地方債などを財源として総事業費約1億8千7百万円で整備されたもので、鉄骨造り平屋建、延床面積174・69㎡で診察室、検査室、レントゲン室等を備え、明るい雰囲気のバリアフリーの仕様で、地域医療を支える拠点となっています。

常駐医師が赴任

5月1日(火)、魚島地区に待望の常駐医師として五嶋良吉医師が赴任しました。

魚島地区では、常駐医師の退職により平成29年6月から特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパンの協力を得てヘリコプターを利用し、広島県神石高原町の鈴木強医師による移動診療が行われていました。しかし、魚島で週に2回、火曜日と金曜日に2時間、高井神島で毎週火曜日1時間の診療に限られたもので、地区住民の医療ニーズに十分応えたものとは言えず、常駐の医師の確保が急務となっていました。

五嶋医師は魚島に赴任する以前は、日本海に面した、鳥取県にほど近い兵庫県新温泉町の公立浜坂病院の総合診療医として5年間勤務し、診療所長、院長を歴任していました。

出身は熊本で、大学を卒業後、一旦はコンピュータ会社に1年余り勤務した後、医学部を受験し、医師となってからは大学で30年ほど地域の麻酔科の第一人者として経歴を積み、その間カナダ留学や指導医を務めたキャリアもあります。

五嶋（ごとう） 良吉（りょうきち） 医師(69)

趣味は、若い頃は登山、最近では天体写真。単身赴任歴は20年で料理のレパートリーは豊富。希望があれば、レシピも教えていただけるとのこと。

浜坂病院では、それまで経験の少なかった総合診療も診察するうちに、釣り針の抜き方、噛み付いたマダニの処置、内科系の疾患の患者さん等々への診察で、ある程度の見当がつくようになったと言います。

しかし、五嶋医師の診療スタイルだと診察には1人当たり15分ほど要するため、自ずと診察できる人数が決まってくるのですが、それを1日に10人ほど超過して患者さんが来られる状態で、多忙を極めていたそうです。「病気のある方は話を聞いてあげるだけで症状が随分変わる」という経験則から、自分のスタイルにあった診療がしたいという思いが募る中、先輩医師から「田舎はいいよ。人情は厚いし、海辺はとにかく魚が美味い」という話を聞いたことから決意を固め、医師の斡旋を行っている自治体病院・診療所医師求人求職センターの門を叩き、そこに医師の求人登録をしていた上島町と上手くマッチングして、この度の魚島への赴任となりました。

五嶋医師の魚島の印象は、「まず日本海沿岸の人よりもオープンな人が多いように感じる、今まであまり診たことがない疾患の方もいて医師としての力量が問われる気がする。」とも。

住民の方に健康づくりのために、「とりあえず、タバコは吸わないでほしい。酒も控えてほしい。脳の萎縮などの原因になる。」、「ちょっと具合が悪くなったら、気軽に受診してほしい。火事と同じで最初のうちは簡単に消せるけど、盛大に燃えてくると大変なことになる。早く消せば後もあまり残らないというのも同じ。できるだけ病気の初期の段階で。本当はかからない方がいいけど、生活習慣病に関しては、習慣を改めることによって、病気の発生をある程度減らすことはできる。」とアドバイスがありました。

過疎・高齢化が著しい魚島の状況には、「できれば、住民、訪問者を増やしたい。船がしょっちゅう往き来するようにしたい。島にあるものを活かして、観光客を呼び込めれば。」と医療を越えた地域の活性化も語りました。

1施工業者に感謝状を贈呈(竣工式) 2最新の設備(レントゲン室) 3明るい雰囲気の受付 4診療所表玄関 5一人ひとり詳しく診察する五嶋医師 6左から　中原看護師、五嶋医師、竹田看護師